

はじめに

本書は熊本中世史研究会の五十周年記念として企画された論集である。巻末の座談会にもあるように、本会は私が熊本大学に着任後、しばらくしての阿蘇品氏との出会いから始まった。とくに目的や会則もなく、中世史に関心を持つものが定期的に集まって勉強会をしようということだった。その折「八幡宇佐宮御神領大鏡」(到津文書)が『大分県史料』として刊行され、それを読むことで「中世史料講読の会」として出発した。

そのころ九州では『佐賀県史料集成』・『大分県史料』・『熊本県史料』それに九州大学の竹内理三先生のもとで『九州荘園史料叢書』が刊行中で、みんな史料探訪の欲求が高く、定例の史料講読とともに、県内や近県の中世史料の探訪・調査を頻繁に行った。

会発足から五・六年、偶然に『筑後鷹尾文書』と出会い、その整理・翻刻出版を機に「熊本中世史研究会」と称することになった。またそのころから九州自動車道の建設等と関連して、八代・球磨の地域研究に会として関わる機会が多くなり、かねて輪読していた『八代日記』を鷹尾文書に続き、青潮社の高野和人氏の理解を得て刊行した。ともに本会の成果として評価されるものと思う。

八〇年代半ばからは、会として中世史年表を作ろうと史料検索をすすめ、その成果は「肥後国中世関係編年史料総合目録」として一応の完成を見ている。そしてこのころから自治体史の編さんが盛んとなり、八〇年代後半には

『新・熊本市史』の編さんも始まり、その中で関連史料の蒐集も大幅にすすんだ。一方地方を見る眼も変化し、中央に対する地方＝辺境といった見方ではなく、東アジア世界の中の九州、「境界」領域としての九州あるいは熊本といった視点が重視されるようになった。それは地域に伝わる寺社や仏神像等への関心を喚起するものだった。早くから中世資料の保存・管理に尽力してきた県立美術館の諸活動に、本会メンバーが関わることも多くなっていた。日本古文書学会二〇〇六年度大会に併せて開催された、重要文化財阿蘇家文書の修覆完成記念「阿蘇の文化遺産展」は大きな反響を呼んだ。そして現在、今秋開催が予定されている「中世球磨の文化遺産」（仮称）の準備が進行中である。

本書所載の各論文は、特に主題を定めて編集したものではないが、自然本会の歴史や現状を反映するものとなっていると思う。便宜「武家権力の地域的展開」「地域のなかの村・都市・神仏」の二部編成とし、各四編の論文とコラム一編を配した。以下簡単にその要旨を紹介し、編者の責を果たしたい。

第1部 武家権力の地域的展開

小川弘和「府官系武士団の展開と肥後国」 府官系武士団の活動で特色づけられる中世の九州は、大宰府の影響を強く受ける筑肥、宇佐宮領が広域に広がる東九州、そして摂関家領島津荘が圧倒的な薩隅の三地域に区分されることは大方の共通認識となっている。その中で唯一、生えぬきの在地勢力菊池氏が、守護大名・戦国大名になっていくという肥後の特質は、大宰大弐として赴任した平頼盛による、府官系武士団菊池氏と結んだ広域な平家領安富領の設定に始まることを指摘している。九州中世成立史の新段階を予感させる論文である。

柳田快明「鎌倉期肥後国野原荘の名体制と小代氏」 本論文は鎌倉期東国御家人小代氏の西遷入部による地域社会の変化を、一部筑後にまたがる肥後国野原荘の八幡宮祭祀役負担者との関係から考察したものである。同荘の当初の名体制は、大半が広大な領主名で有明海沿岸部の要衝を占め、祭祀役の負担者は、荘内外の名主や地侍層で、その一

部は矢部川流域にいたる有明海沿岸部にまでも及んでいたという。蒙古襲来を期に入部した惣地頭小代氏は、一族全体で統制を強め、名体制を再編し領域支配を強化したとする。内海沿岸部の境界域にある莊園や村落の存在形態を示す論稿としても興味深い。

山田貴司「文禄・慶長の役と加藤清正の領国支配」 本論文は文禄・慶長の役における豊臣政権の「際限なき軍役」
Ⅱ軍夫・船子・諸職人・町人にいたるまでの総動員体制の実相を具体的に論じ、加藤領国特有の軍事的性格の強い支配体制の継続が、村・百姓の疲弊を生み、加藤氏の近世大名への転換を困難にした、とする。近年大きくすすんだ清正および清正文書の研究にもとづき、二〇一二年県立美術館での「加藤清正展」を主宰した山田の最新の研究成果である。

稲葉継陽「近世初期細川家臣団起請文にみる熊本藩「国家」の形成」 ここ五年余にわたり熊大文学部の永青文庫研究センターの中心として、細川家関係文書の整理・研究に当たってきた筆者の最新論文である。細川家では豊前時代以来の当主忠利と隠居三斎(忠興)の対立は、肥後入封後「御家騒動」の域まで深刻化していた。本論文は、忠利の死去、光尚の襲封そして正保二年(一六四五)の三斎の死去にいたる時期、家老衆以下多くの有力家臣が、相互に誓い合っ
て提出した一〇〇通におよぶ血判起請文の考察から、幕藩制下細川家の「御国家」体制を確立させる武士たちの意識の変化と苦渋にみちた歩みを活写している。

〈コラム〉中村一紀「筑紫の乱における菊池隆直と阿蘇惟泰」 治承四年秋、平家支配の大宰府を攻めて敗れた、菊池隆直・阿蘇惟泰らは、一旦追討使貞能に従って上京、寿永二年八月平家一門とともに大宰府に下った。その時、「隆直は平家を通すため大津山の関を空けると称して帰国してしまい召しても来なかつた」という『平家物語』等の記述は、隆直ではなく、肥後で鎌倉初期にも存在が知られる惟泰の動きを示すものと見る。

第2部 地域のなかの村・都市・神仏

春田直紀「中世肥後国における「村」と「浦」」 本論文は十二世紀から十六世紀までの肥後国における「村」と「浦」の初見史料を網羅的に検出し、その位相を史料類型別に析出し、サトとムラを立体的に復元することを目指す。荘園・公領の所領単位の基盤となるのは「私領」の形成であった。荘園制下のそれは「名」等の収納単位となるが、「村」と「浦」は「簡単に離合集散できない生活体」をふくむものとして把えられ、その認識が、サト・ムラの制度的な位置付けの歴史的条件となった、としている。

青木勝士「中世後期菊池氏による港湾都市「高瀬」統治」 中世高瀬津は、有明海沿岸の菊池川河口の港湾都市として古くから注目されて来た。本論文は、中世の高瀬と周辺の状況を詳論し、さらに南北朝期以降の惣領家と庶家高瀬家が交替する菊池氏による高瀬津支配の変遷を、関連史料を挙げて通時的に考察している。前半の叙述はやや煩瑣であるが、筆者長年の研究を総括した本論文は、中世の高瀬についてのトータルな知見を得る上で有益である。

有木芳隆「熊本・東禅寺の正平二五年「院□」銘・釈迦三尊像について」 本論文は、体内銘文によって、正平二五年（一三七〇）の造立で、当初から同寺の本尊であったことが分る御船町東禅寺の釈迦三尊像について、造立の歴史的環境や仏師の作風等を総合的に検討し、それは九州の南北朝期の仏像の基準例とし得るものであるとしている。中世における地域社会のトータルな把握には、仏神像や金石資料の研究は欠かせない。本論文の取載は、近年の本会の研究活動の一面を示すものでもある。

阿蘇品保夫「阿蘇下野狩と下野狩史料の形成」 阿蘇品はかつて『神道体系 神社篇 阿蘇・英彦山』で、中世阿蘇社の神事下野狩の最重要史料として、同社所蔵の「下野狩集説秘録」を紹介した。これに対し、近年飯沼賢司は、永青文庫所蔵の「下野狩日記 上・下」や「下野狩日記抜書」等を収める『阿蘇下野狩史料集』（思文閣出版）を刊行、「集説秘録」は「狩日記」などの抄本で、史料的な価値は劣るとした。本論文は、両者を詳細に比較検討し、下野狩

は、南北朝期以降の二つの大宮司家の対立を克服した惟忠の時代、政治的デモンストレーションとして始められたものとみられ、狩奉行の下田権大宮司家に伝えられた「延徳三年記」などをもとに編さんされた「集説秘録」の史料価値が高いことを主張している。

〈コラム〉工藤敬一「『片寄』再考―関東御領永吉荘の存在形態から」 荘園史上「片寄」とはいかなる状況をいうものか、球磨御領の再編で成立した永吉荘のあり方から再考した小論。

本会発足以来の会員中村一紀氏は、昨年十一月二十七日急逝された。享年七十七歳。本書に寄せられた論考の最後の仕上げを進められている最中であつた。痛恨の極みである。謹んでご冥福を祈りたい。本書所載のコラムが、遺稿となつてしまつた。本稿は中村氏が準備した論文の一部を柳田快明氏が整理したものである。

本会は細々ながら半世紀にわたり、熊本における中世史研究の中心として一定の役割を果たして来た。この間様々のお世話になつた方々は数知れない。この機会に厚くお礼申し上げたい。

また会の運営については、阿蘇品・柳田・青木の三人のお世話役の苦勞に負うところが大きい。そして本書の企画・刊行については、小川・柳田・山田三氏に御尽力いただいた。

本書の刊行が、本会の新たな出発点となることを願つている。

二〇一五年一月

工藤敬一

目次

はじめに

第1部 武家権力の地域的展開

府官系武士団の展開と肥後国……………	小川弘和	11
鎌倉期肥後国野原荘の名体制と小代氏……………	柳田快明	41
文禄・慶長の役と加藤清正の領国支配……………	山田貴司	73
—「際限なき軍役」の様相とその影響—		
近世初期細川家臣団起請文にみる熊本藩「国家」の形成……………	稲葉継陽	109
❖コラム❖筑紫の乱における菊池隆直と阿蘇惟泰……………	中村一紀	133

第2部 地域のなかの村・都市・神仏

中世肥後国における「村」と「浦」——史料類型別分析の試み——……………春田直紀 143

中世後期菊池氏による港湾都市「高瀬」統治……………青木勝士 205

熊本・東禅寺の正平二五年「院□」銘・釈迦三尊像について……………有木芳隆 245

阿蘇下野狩と下野狩史料の形成……………阿蘇品保夫 275

——「下野狩日記」と「下野狩集説秘録」——

❖コラム❖「片寄」再考——関東御領永吉荘の存在形態から……………工藤敬一 355

座談会熊本中世史研究会の五〇年を振り返る……………熊本中世史研究会

あとがき

執筆者一覧